

国際的なバレエコンクールで凌ぎを削るのは、輝かしい未来を夢見る 10 代の若いダンサーたちだ。上位入賞を獲得できれば、夢は突然現実味を帯びてくる。海外で学ぶチャンスは開け、海外の著名なカンパニーで活躍する道も広がり、世界的に有名なダンサーになるのも夢ではなくなってくる。この道を歩む第一歩として最初の目標は、国際的なコンクールで上位入賞を果たすことである。そこでは規定の古典作品を踊れるのはもちろんのこと、才能の煌きを感じさせ、個性が輝く作品も踊れなければならない。なんとか上位入賞を果たせたいと願う親や子供の頃から教えてきたダンス教師がその夢を託すのが、国際的なコンクールで何度も上位入賞作品を提供している振付家である。矢上恵子は、そうしたコンクール作品を依頼される人気振付家の一人である。

だがコンクールの課題作品を創る振付家、と思われることは矢上にとって本意ではない。作品は上位入賞のための道具ではない、という思いがあるからであり、作品に対する愛着や完成度の高さに対する誇りもあるからだろう。「わたしはいつも皆に言っているんです。コンクール用に作品を作っているのではないですよ。」と。しかし依頼する人の期待も頷ける実績がある。96 年からほぼ毎年、ローザンヌコンクールに参加するダンサーに振付けているし、1999 年には世界バレエ&モダンダンスコンクールで、金賞受賞者の作品を振付け、特別振付賞も受賞した。その名は、日本だけでなく海外にも伝わり、韓国からの依頼を受け、コンクールのために一度に 3 人も振付けたこともあるほどだ。

国際コンクールという晴れ舞台は、プロのダンサーになるための最初的一大関門であり、プレッシャーも半端なものではない。忍耐力や精神力も必要とされる。しかし参加者が一番多い 15 歳位は、思春期真っ只中の難しい年頃。「どんなに短い作品であっても、最低半年前から、時間をかけてじっくりダンサーと向き合います。頼むならなるべく 1 年前にしてほしい。」とのことだ。

振付け作業に入ると、ダンサーからの振付スタイルに対して抵抗を受けたり、それまで慕っていたダンス教師や振付家に対しての反発が生まれたり、様々な葛藤や闘いが生じる。ダンサー自身が抱えるストレスもたくさん噴出して来る。裸でのぶつかり合いの中で、時には荒療治もする。「仮面を剥がすために、わざと泣かすこともありますよ。もちろんそのフォローはちゃんとしますけど。」その結果、強い信頼関係が生まれ、ダンサーは人間として成長もする。「以前はシビアで、ストイックな感じでやってました。なんとかしてあげないといけない、という気持ちが強かったからでしょう。最近は、妥協もできるようになったし、笑いもあるし、しんどかったら辞めた方がいいよ、と言える位（余裕もできて）、以前と大分違ってきました。」

作品を依頼されると、送られてきたビデオでダンサーの踊りを見てから最初に決めるのは音楽。「どんな動きが得意か、といったことより、まずその子の性格を見ます。振付をする際にも、その子の反応をずっと見てます。ビデオで見ただけで作ったのに、その子が今抱えている問題が作品になっていたこともありました。たとえば、自分の卵の殻に閉じこもってばかりいないで、外に出てきなさいよ、といったように。」

作品には矢上らしい作風やポリシーも溢れる。

「ダンサーといっしょに作り上げるものだから、ダンサーが踊り終わったときに、何か開放される感じがあればいいな、と思っています。」

「私の作品のベースは古典です。あまりそう思ってもらえないけど、訳のわからないことをやるのはあまり好きじゃないのです、メッセージはあるけど、それを受け止めて欲しいとは思っていない。見方は十人十色で、何かを感じてもらえばいい。」

子供の心を深く理解できる人は、子供らしさを失っていない人だと言われている。矢上はどんな子供時代を過ごしたのだろうか。

「子供の頃からずっと思っていたのは、天才になりたい、ということです。小さい頃から人生計画をしっかり立てていましたし、生まれてくるのが早過ぎた、と思ったりもしてました。」と語る。早熟でユニークな発想の子供だったようだ。「天才になりたいって言ったら皆に絶句されて、『そんなことを言うのは、関西人だから？』って聞かれたこともあります。でも（天才になるのは）去年位にあきらめました。」と笑い、こちらもすっかり煙に巻かれた。最近は気功を始めたとのこと。「今もまだまだ変身中です。」

今回のワークショップでは、10～14 歳の年齢のダンサーが対象である。

「いろいろなことをはっきり主張し出す年頃だから、思春期になる前が一番面白い。この年齢でコンテンポラリーのレッスンをやるところがなかなかないし、コンテンポラリーが踊れると古典も良くなることがあります。あまり早すぎてもだめだけど、この時期から講習を受けて踊れるようにしておいた方がいいと思います。」